

# 初等科修身

二

文部省



## 五 宮古島の人々

明治六年、ドイツの商船ロベルトソン號は、日本の近海で大あらしにあひました。帆柱は吹きをられ、ボートは押し流され、あれくるふ大波の中に、三日三晩、ゆられにゆられました。さうして、運わるく、沖繩縣の宮古島の沖で海中の岩に乗り上げてしまひました。

船員たちは、こはれた船に取りついて、一生けんめいに

助けをもとめました。

十六

この船をはるかに見た宮古島の見張りの者は、すぐ人を呼び集めて、助け舟を出しました。しかし、波が高いので、どうしても近づくことができません。日はとつぶりとくれました。しかたなく、その夜は陸にかかり火をあかあかとたいて、ロベルトソン号の人たちをはげましながら、夜を明かしました。

あくる日は、風もおどろへ、波もいくらか静かになりました。島の人々は、今日こそと勇んで、海へ乗り出しました。

た。舟は、木の葉のやうにゆられ、たびたび岩にぶつかりさうになりましたが、みんなは力のかぎりこいで、やつとロベルトソン号にたどり着きました。さうして、つかれきつてゐる船員たちを、残らず助けて歸りました。



十七

薬をのませたり、傷の手當をしたりして、島の人々はねんごろにかいはうしました。ことばが通じないので、國旗をいろいろ取り出して見せますと、始めてドイツの人であることがわかりました。

かうして一月あまりたつ間に、ドイツ人は元氣になりました。そこで島の人々は、一さうの大きな船をかして、ドイツ人を本國へ歸らせるようになりました。出發の日、島の人々は、かねやたいこて、にぎやかに見送りました。何人かの人は、小舟に乗つて、案内をしながら、はるか沖あひまで送つて行きました。

船員たちは、月日を重ねて、ぶじに本國へ歸りました。うれしさのあまり、あふ人ごとに、しんせつな日本人のことを話しました。

そのうはさが、いつのまにか、ドイツの皇帝に聞えました。皇帝は、たいそう喜んで、軍艦に記念碑いをのせて宮古島へ送りました。その記念碑は、今もこの島に立つてゐて、人々の美しい心をたたへてゐます。